

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	保育者の資質向上が保育実践に与える影響 ーディベート教育プログラムの導入ー				
研究組織	代表者	所属・職名	短期大学部・准教授	氏名	副島 里美
	研究分担者	所属・職名	九州大学 言語文化研究院・教授	氏名	井上 奈良彦
		所属・職名	京都大学 エネルギー科学研究科・教授	氏名	下田 宏
		所属・職名	京都大学 エネルギー科学研究科・助教	氏名	上田 樹美
	発表者	所属・職名	短期大学部・准教授	氏名	副島 里美

講演題目	ディベート教育が保育実践に生かされるか
------	---------------------

**研究の目的、成果及び今後の展望**

**【研究の目的】**

本研究は、保育の質向上のための研修のあり方を検討するものである。研究方法としては、即興型ディベートを使用した研修会（研修＋試合形式）を、2022年4月～2023年2月にかけて全16回、遠隔（zoom）で実施した。なお、各回終了後にアンケートを回収した。ここでは最終回に行ったまとめのアンケート結果から、本研修が、保育実践にどのような形で生かされたかについて検討する。

**【成果】**

本研修会の対象者は静岡県内に勤務する現職保育者である。4月当初は22名が参加したが、期の途中で仕事が多忙になった者1名、病気療養で退職した者1名を除き、20名を対象としている。研修会の終了後に、毎回アンケートを実施したが、本データは、最終回（2023年2月）終了後に実施したアンケート結果である。本アンケートには19名が回答。回答率は95%である。回答者の平均年齢は46.1歳（28歳～64歳）、保育者としての勤務平均年数は20.7年である。表1 保育実践で役立つ内容

対象者に「ディベート研修は保育の実践に役立つと思うか」の質問では、19名全員が「思う」と回答した。その詳細を記述式で質問した結果、「会話や会議などでの技術的な面（話し方や進行方法）」が12名（63.2%）、「人間性（自己、他者、集団、保護者）の理解」が10名（52.6%）となった。ただし、この二者にはつながりがある。私たちは、なぜ相手を尊重し、あるいは、会議などをわかりやすく、上手にファシリテートしたいと願うのだろうか。それは、自分をわかってほしい、あるいは相手（集団）と円滑なコミュニケーションを作りたいと思うからであろう。つまり、ディベートを使用した研修は、自分あるいは他者を理解するためのツールとして使用できる可能性がある。

カテゴリー	詳細	
多様性の理解	多様な立場を理解する	6
会話技術の習得(話し方の方法を学ぶ)	わかりやすい話し方	5
	相手を尊重した話し方	4
会議技術の習得	ファシリテートの方法を学ぶ	3
自己理解	自分の意見の明確化、自分の話し方のくせを知る	2
他者理解	保護者理解	2
合計		22

なお、今回は遠隔での開催となったが、「遠隔実施でコミュニケーションは取れましたか」の質問には、全員が取れた（非常に取れた：26.3%、取れた：73.7%）という結果となった。しかしながら、開催方法の質問では、「対面でのディベート研修があれば受けてみたい」とする対象者も11名（57.9%）いることから、今後は実施方法についても検討していく必要性が打ち出された。